

#### Q14-「磯焼け」って何ですか？

A- 海の沿岸部に生育する海藻の群落は衰退もしくは消失して、魚介類が減少の成長に影響を及ぼし、漁業生産が著しく減少することを「磯焼け」と呼んでいます。狭義には大型褐藻のアラメ、カジメ、サガラメ、コンブ類、ホンダワラ類（これら大型海藻の群落は「海中林」と呼ばれる）や紅藻のテングサ類などの海藻群落の極端な減少や消失を指しますが、広義にはこれら海藻群落（魚介類の餌、産卵・保育・生息の場）の減少・消失が魚介類生産の減少を招くことまでを含みます。「磯焼け」はもともとは静岡県伊豆東海岸地方の漁民が使っていた言葉で、海藻学者の遠藤吉三郎(1911)がその著書「海産植物学」の中で伊豆東海岸のテングサ漁場の荒廃について紹介したことから広く使われるようになりました。大型海藻が消失したあとにサンゴモ（無節石灰藻）が海底を覆い、海底が白っぽく見えるようになることがあります。必ずしもサンゴモで海底が白っぽく見えることだけを指すではありません。海藻群落の消失は、古くは淡水流入による塩分低下や海水の汚濁が原因として挙げられていましたが、現在は、海水温の上昇、動物による食害（摂食圧）、砂泥の堆積、台風による流失などが重要な要因と考えられています。古くから知られていたのは、伊豆半島の南東部で黒潮流軸の接岸に伴う水温上昇の影響を受けてアラメ・カジメやテングサの群落は消失し、その影響でアワビなどの漁獲が著しく低下する現象で、上に述べたように「磯焼け」という呼び名もこの地方に起源があります。ウニの食害によりコンブやアラメ・カジメの群落は消失することもかなり以前から知られていました。また、近年では海水温上昇のためと考えられていますが、南方系の植食性魚類がこれまでより北上する（あるいは低水温期でも留まる）ようになり、大型海藻に大きな食害を及ぼすため「磯焼け」が生じると判断されるケースが九州沿岸や静岡県沿岸でも知られるようになってきました。このような植食動物を除去したり、海藻に接近できないようにしたりして、「磯焼け」を防ぐ実験的な研究も行われています。